

リクという男の子

アイラインは綺麗に決まった。これで目元はバツチリ可愛い。あとはリップを塗って、ウィッグを被せるだけだった。それで大澄^{おおすみ}リクちゃんの出
来上がりだ。

この子は二回目の来店で二十歳の男の子だ。やっぱり若いだけあって肌は綺麗で、メイクをするとよく映える。前回もそうだったが、とても可愛い女の子になるのだ。^{おおさとしんご}大里慎吾はそれが楽しみだった。

「はい、できましたよ」

ウィッグを被せ終わると慎吾は言った。この子を選んだのはショートボブだった。ショートヘアが好きらしい。

それを被せてやって、まずは慎吾だけが、ちゃんと決まっているかを確認する。

「うん、バッチリだね」

彼は笑みを浮かべてそう言った。自分の出来栄えには満足していた。するとリクはニコリと笑みを浮かべた。

そのあとで手鏡を渡して、実際の仕上がりを見せてやるのだ。

「わぁ、可愛い！」

男の子の声でリクは喜んでくれた。笑顔はどこにでもいる二十歳の女の子だ。その笑顔が見たくて、慎吾はこの仕事をしているのだ。

「気に入ってくれたかな？」

「はい、最高です。イメージどおりです。ありがとうございます」

彼女は本当に幸せそうに笑っている。そんなに喜んでもらえることやりが
いがある。

「じゃあ、こっちで見てみて」

慎吾はスタンドミラーの前に立つように促した。リクは椅子から立ち上
がって、スタンドミラーの前に立った。

可愛いミニスカートがひらひらと揺れて、その裾からは細くて形の良い
二本の太腿が伸びていた。ムダ毛は綺麗に処理されていて一本もない。見
事にツルツルの脚だった。普段から気をつけているらしい。

「ああ、可愛い！　すごい、すごい」

リクは手を叩いて、はしゃいでいる。スタンドミラーの前でモデルのよ

うに一回りしながら、後ろ姿も確認しているのだ。輝かしい笑顔だった。